

日本音楽学会 2025 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 1 期採択）

アレッサンドロ・スカルラッティ没後 300 年記念

—演奏会と講演会—

報告記

佐々木なおみ

本企画「アレッサンドロ・スカルラッティ没後 300 年記念 —演奏会と講演会—」は、同作曲家（Alessandro Scarlatti, 1660–1725）の没後 300 年を記念し、秋に 2 回のオンライン講演会を実施するとともに、年末に 2 日間の演奏会を開催したものである。日本イタリア古楽協会の主催により、企画者の佐々木の他、福島康晴（指揮）、中村康紀（テノール）、綱河恵理子（経理）の 4 名の実行委員が準備・運営の中心的な役割を担った。

スカルラッティは多数のオペラとオラトリオ、ならびに 600 曲以上のカンタータを残し、ナポリ楽派へと至る伝統を築いた作曲家である。また、「イタリア式序曲（シンフォニア）」を通じて前古典派の交響曲への橋渡しを行った点でも、音楽史上きわめて重要な位置を占めている。しかしながら、息子ドメニコと比べると、その人物および作品は広く知られておらず、演奏機会も多いとは言えない。日本語で読める一般向けの書籍も、リーノ・ピアンキ著『オラトリオの起源と歴史』（松本康子訳・金澤正剛監修、カワイ出版 2005 年）の第 5 章「アレッサンドロ・スカルラッティ」を除いて、現在のところ存在しない。

このような状況を踏まえ、本企画の講演会では、近年の研究成果に基づき、スカルラッティの生涯と作品について幅広く紹介する機会とした。また演奏会では、宗教・世俗、声乐・器楽の両ジャンルから代表的な作品を取り上げ、2 日間にわたって解説とともにその音楽を聴いていただくことを目的とした。以下では、2 回の講演会および 2 回の演奏会について報告する。

講演会

〈第 1 回オンライン講演会〉 「アレッサンドロ・スカルラッティの生涯と作品」

企画者の佐々木が講演を担当し、2025 年 10 月 30 日から 12 月 31 日まで録画によるオンライン配信を行った。第 1 回は無料配信としたことが功を奏し、配信期間中に 100 名の申込があり、関係者を含めて約 130 名が視聴した。スカルラッティに対する関心の高さがうかがわれた。

日本音楽学会の Information mail と公式 HP に早くから情報が掲載され、その他 SNS での情報拡散により、視聴者は、日本音楽学会会員のほか古楽演奏家、学生、古楽愛好家など多岐にわたり、一般の視聴者が大半を占めていた。このような視聴者層は事前に想定していたため、専門用語には適宜説明を加え、画像資料を用いてイメージが膨らむよう工夫しつつ、全 26 枚のスライドを用いた約 1 時間の講演動画を作成した。

今回の「生涯と作品」という講演内容は、概説的なものが求められるがゆえに準備に苦勞した。パガーノの大著 (Pagano1985/改訂 2014) をはじめとする先行研究を参照しつつ、スカラッチェの複雑な生涯を整理する作業は、しばしば迷路に入り込むような感覚を伴うものであった。さらに、配信開始の約 2 週間前に、スカラッチェ一家に関する約 100 通の書簡を扱った文献が新たに刊行され、急きょ入手して講演内容を拡充することとなった。これらの書簡は、スカラッチェの人物像をより鮮明にするとともに、南イタリア的な家父長制的思考や家族関係を浮き彫りにする点で非常に興味深いものであったが、配信直前に生涯を再構成する必要が生じ、時間との闘いであった。

以上の調査を踏まえ、本講演会ではスカラッチェの生涯を四つの時代に区分して論じる独自の方法を採用した。すなわち、①ローマの有力貴族の庇護を受け、オペラ作曲家として名を成した「第 1 ローマ時代」、②ナポリ王宮礼拝堂楽長に任命されるも、給与未払いに苦しんだ「第 1 ナポリ時代」、③より良い生活環境を求めて各地を転々としたが成果が得られなかった「第 2 ローマ時代」、④最終的にナポリ王宮礼拝堂に戻った晩年の「第 2 ナポリ時代」である。都市移動の意味を問いつつ、各時期において活動拠点をどこに置き、何を模索していたのかという視点がそこに含まれる。講演会の中では 4 つの時代の説明を進めるたびに区分表を提示し、視聴者に混乱が生じないように配慮した。

講演会では、以下のような新たな視点を加えることで、スカラッチェの生涯をより立体的に論じることができたと考える。第一に、17、18 世紀における歴代教皇のローマでのオペラ禁止・容認政策の変化を図解し、スカラッチェが貴族との良好な関係を保ちながら彼らの私邸でオペラを上演していた背景について論じた。第二に、書簡の日付に着目し、彼が常に複数の貴族 (フェルディナンド公、オットボーニ枢機卿、アルバーニ枢機卿等) に手紙を送り、次の就職先を模索していた実態を明らかにした。第三に、1707 年のヴェネツィアにおけるオペラ《ミトリダーテ・エウパートル》の失敗の背景を検討し、それが以後のスカラッチェの活動を方向づける重要な経験となったことを示した。



このほか、新婚期にローマのベルニーニ邸に居住していた事実、ウルビーノにおける娘クリスティーナの修道院立てこもり事件、さらに近年娘フラミーニアの可能性が指摘されている肖像画の紹介など、日本ではこれまで知られていなかった情報についても取り上げた。

以上の考察を踏まえ、スカラッチェの生涯を次のように総括した。圧倒的な作品数と数々の革新的な試みは、スカラッチェの天才性を示すものであり、多くの王侯貴族や教

皇による庇護は、その才能に対する高い評価と理解の表れであったと言える。一方、現存する書簡史料からは、給与の未払いや大家族を抱える厳しい生活状況が浮かび上がり、書簡や作品を通じて貴族との関係を維持し、雇用の機会を待ち続けていた実態が明らかとなった。また、子どもたちに対して強い父権を示し、家族とともに都市を移動する厳格な家長としての姿と同時に、家庭人としての温かな側面も読み取ることができた。

最後に時間が短くなってしまったが、スカルラッティの作品全体を概観した。まず、活動の全体像が把握できるよう各ジャンルの作品数を提示した。オペラ 66 曲、セレナータ 33 曲、カンタータ 600 曲以上、マドリガーレ 9 曲、オラトリオ 36 曲、ミサ曲 10 曲、モテット 86 曲、その他の宗教曲も多数存在する。さらに器楽曲としては、鍵盤作品 30 曲、弦楽作品 16 曲、リコーダー作品 11 曲が確認される。それぞれのジャンルの代表作を挙げて創作の傾向を明らかにし、作風の革新性について言及したうえで、次回の講演へとつなげた。配信期間中の視聴回数は 280 回に達した。

〈第 2 回オンライン講演会〉 「演奏作品解説 - 創作活動からみるその特質と魅力 -」

第 2 回目の講演会では、年末に開催する演奏会で取り上げる作品について、その成立背景および音楽的特質を解説し、スカルラッティ作品の魅力と独自性を伝えることを目的とした。本講演会は視聴料 1,000 円の有料配信としたため、前回ほどの参加人数には至らなかったものの、33 名の申込があり、関係者を含めると 60 名以上が視聴した。配信期間は 2025 年 11 月 30 日から 12 月 31 日までとした。

今回の演奏会プログラムは、スカルラッティの世俗・宗教、声楽・器楽のあらゆるジャンルから、知られざる傑作を選んで構成されている。講演では各作品の成立背景や、どのような点で時代を超えた魅力を有しているのかといった、作品理解に不可欠な観点からアプローチし、聴きどころを解説した。すべての演奏作品を順に取り上げ、冒頭数十秒ではあったが、楽譜を見ながら音源を視聴する時間を設けたことで、演奏会への期待感を高めることができたと考えられる。実際に、事前に CD を購入して予習しているという感想も寄せられた。

講演では、スカルラッティの自筆譜や書簡、重要な写本、ショート・オクターヴ鍵盤の構造、当時の絵画などを含む全 42 枚のスライドを用い、約 1 時間 15 分の内容で配信を行った。オペラ《ミトリダーテ・エウパートル》に関する解説では、2025 年 2 月にヴェネツィア国立古文書館で行った調査に基づき、異端審問官が発行した台本出版許可証（いわゆる *faccio fede*）という一次史料も紹介した。あわせて、このオペラが不評に終わった背景を論じ、その結果としてスカルラッティがナポリ王宮礼拝堂に復帰し、以後、悲劇台本によるオペラ作曲を行わなかったという事実についても言及した。



本講演会で解説した演奏作品は以下の通りである。

演奏会 1 日目 (世俗作品)

- ・ 2本のリコーダーを伴うコンチェルト・グロッソ形式のシンフォニア第5番
- ・ チェンバロを伴わない4声のソナタ第3番
- ・ 第1旋法のトッカータ第7番および《フォリーア》
- ・ カンタータ《この木陰の静けさのなかで》
- ・ オペラ《ミトリダーテ・エウパートル》抜粋 (演奏会形式)

演奏会 2 日目 (宗教作品)

- ・ 《スターバト・マーテル》
- ・ オラトリオ《ラ・ジュディッタ》(ローマ 1694 年版) 抜粋

以上の2回のオンライン講演会はいずれも概ね好評を得た。「スカルラッチェイの人柄や生活が目浮かぶようだった」、「バロック時代の作品を学ぶことが楽しくなった」、「遠い存在だった作曲家が、生きた存在として感じられた」、「講演を聴いたことで演奏会を何倍も楽しめた」といった感想が寄せられ、本企画の目的が一定程度達成されたことを確認することができた。

演奏会

2025年12月26日(金)に五反田文化センター音楽ホールにて「演奏会1日目・世俗作品」のプログラム、翌12月27日(土)には神田キリスト教会にて「演奏会2日目・宗教作品」のプログラムに基づく演奏会を行った。

2025年12月11日にアーツカウンシル東京の助成金交付決定通知を受け、かねてより懸案されていた弦楽器奏者の増強を決定し、ヴァイオリンおよびヴィオラに各1名ずつ新たな奏者を迎えた。急な決定であったが、幸いにも実力ある古楽奏者から出演承諾が得られ、スカルラッチェイが想定した編成により近い形で演奏を行うことが可能となった。このような編成の充実は、音楽的成果を高める重要な要因の一つであったと考えられる。

両日ともに出演者は20名で、使用楽器はすべて古楽器とした。演奏会は企画者が司会を務め、曲間に解説を交えながら進行した。声楽作品については全曲に字幕を投影したが、字幕制作は音楽的判断を伴う極めて精緻な作業であり、楽譜制作を担当した3名が分担し

て準備を行った。これを 2 名の字幕担当スタッフが全リハーサル日程に参加して調整し、本番での投影を実現した。

当日配布のパンフレットは 500 円で販売した。演奏会準備に奔走される中でうっかり書き忘れてしまったが、企画者の執筆によるものである。先に示した四つの時代区分に基づくスカラッティの生涯概説に始まり、演奏作品解説、主要参考文献、歌詞対訳、出演者プロフィールを含む全 38 ページの構成とした。講演会で使用した画像も含め、視覚的にインパクトのある内容を目指した。B5 判の美しいデザインは、チラシと同様に、テノールとして出演した中村康紀氏によるものである。

プログラムの選曲にあたっては、幅広いジャンルからスカラッティの革新性を示す傑作を選び、その音楽を通じて長らく忘れられてきた作曲家の存在を伝えたいという強い思いがあった。その結果、2 日間にわたって大規模かつ内容の異なるプログラムとなり、ほぼ同一の演奏者が連日出演するという、準備・演奏の両面で極めて負担の大きい公演となった。しかし、第一線で活躍する出演者の高い集中力と音楽性、ならびにスカラッティ作品への深い共感に支えられ、最終的にクオリティの高い演奏会を実現することができた。企画した研究者としてこれに勝る喜びはなかった。

準備段階において最も多くの時間を要したのは、演奏用楽譜の作成であった。今回選曲した作品の大半は未出版であるため、自筆譜あるいは重要な手稿譜をもとに、福島康晴（指揮）、中村康紀（テノール）、企画者佐々木の実行委員 3 名が分担してスコアおよびパート譜をフィナーレで作成した。《チェンバロを伴わない 4 声のソナタ》《トッカータ》《スターバト・マーテル》を除くすべての演奏作品は、今回新たに作成した楽譜を用いて演奏した。楽譜作成には約 1 か月半を要したが、オリジナルに忠実で修正箇所がほぼなく、目に優しい（老眼の進む我々世代用にフォント大きめ）、実践に即した美しい楽譜が完成したと自負している。

〈演奏会 1 日目・世俗音楽〉

2025 年 12 月 26 日（金）五反田文化センター音楽ホール 18:30 開演

本公演は一般の仕事納めの日と重なったこともあり、入場者数は約 160 名であった（会場定員 250 席）。しかしながら、開演直後から熱意ある拍手が送られ、出演者一同、高い集中力を保ったアンサンブルを披露することができた。

〈前半〉器楽曲とカンタータ

前半は《コンチェルト・グロッソ形式の 12 のシンフォニーア》で幕を開け、続いて企画者による挨拶と作品解説を行った。スカラッチェティがリコーダーを多用した作曲家である



ことは必ずしも広く知られていないが、本曲集は全曲にリコーダーを用いた、当時としては珍しい曲集であることを説明した。

第 2 曲目の《通奏低音を伴わない 4 声のソナタ》は、後の弦楽四重奏の萌芽とも捉えうる作品である。一方で、現存史料には通奏低音の数字が書き込まれたものも存在するため、今回は演奏者による音楽的判断に基づき、テオルボを含む編成で演奏した。第 3 曲目の《トッカータ ニ短調》は、鮮烈かつ奔放な音楽的創意に満ちた大曲で、演奏時間は 20 分を超える。続く第 4 曲目の二重唱カンタータ《この静かな木陰に》は、後半で取り上げるオペラ《ミトリダーテ・エウパートレ》が 1707 年に不評に終わり、失意のうちにウルビーノに立ち寄った時期に書かれた作品である。講演会でも紹介した当時の手紙を引用し、作曲家の心情と作品成立の背景について説明を加えた。

〈後半〉オペラ《ミトリダーテ・エウパートレ》(1707 年ヴェネツィア初演)

後半は、スカラッチェティの最高傑作の一つとされながら、世界的にも演奏機会の極めて少ないオペラ《ミトリダーテ・エウパートレ》を取り上げた。今回は全 5 幕から重要なアリアを抜粋し、物語の展開を企画者が解説しながら演奏会形式で上演した。レチタティーヴォをすべて省き、アリアと解説のみで 5 幕構成の悲劇を伝える試みは容易ではなかったが、音楽の流れを妨げないよう、場面説明を最小限にとどめ、リズムカルに進行させたことが功を奏した。公演は大きな喝采のうちに終演を迎えた。



本公演では、マエストロ福島康晴氏の統率力が見事であった。スカララッティの傑作であると同時に難曲でもあるプログラムを、当時の演奏様式と理論への深い知識に基づいて実現し、オリジナルに厳格に、しかし一人一人の音楽的創意を存分に引き出していった。企画者は史料を集めプログラムを構築し、作品成立の背景を提示した後は、全てを福島氏と演奏家に預け、現代を生きる演奏家の感性とともに音楽が立ち上がるのを目の当たりにした。演奏会は研究と演奏が手を結ぶ瞬間であったように思う。



Sop. 阿部早希子、佐藤裕希恵、向野由美子、A. 久保法之、Br. 藪内俊弥、Rec. 太田光子、大塚照道、Vn. 杉田せつ子、池田梨枝子、宮崎蓉子、佐々木梨花、Va. 春木英恵、Vc. 懸田貴嗣、Tior. 佐藤亜紀子、Org. 辻文栄、指揮：福島康晴、お話：佐々木なおみ

〈演奏会 2 日目・宗教音楽〉

2025 年 12 月 27 日（土）神田キリスト教会 17:00 開演

2 日目の演奏会は土曜日の夕方の開演とあって、事前のチケット販売数は既に好調であったが、初日の成功の勢いで一気にチケットが売れ、26 日深夜には会場の席数を超えるほどになっていた。実行委員 4 名で急ぎネット協議を行い、まずは出演者に手売りチケット分を売らないよう、また SNS 等で「満員御礼」の告知を拡散するよう急ぎ対応した。しかし SNS を見ずに当日券を求めて来る人々もあったため、最終的に定員 180 名のところ補助席を出して 200 名近い入場者となった。普段は静寂な教会が大変な熱気に包まれていた。

〈前半〉《スターバト・マーテル》全曲演奏

《スターバト・マーテル》といえばペルゴレージの作品が広く知られているが、その基となったスカララッティの同名作品については、ほとんど知られていないであろう。18 世紀ナポリでは、四旬節期間および 9 月 15 日の「悲しみの聖母」の祝日に、《スターバト・マーテル》を市内の教会や音楽院で演奏する伝統があり、本作品もその一環として「悲しみの聖母騎士団信心会」の依頼により、第 2 ナポリ時代に作曲されたと言われている。ス

カルラッティの死後 11 年を経た 1736 年、同信心会はより小規模で新しい様式の作品をペルゴレージに委嘱したが、若き作曲家は完成直後にこの世を去った。

このような成立背景を解説したうえで、スカルラッティの《スターバト・マーテル》を全曲演奏した。おそらく日本初演だったのではないかと思われる。ソリストの二人によれば、崇高で静謐な美しさとは裏腹に、技術的には極めて難度の高い作品であるという。リ



ハーサルでも音楽性の異なる 18 の短い楽章を一つ一つ創り上げるのに多くの時間と精神力を要した。50 分近い大曲であったが、心を突くような鋭く美しい旋律と、ソリスト二人の得も言われぬ響き合いを客席の端で堪能しながら、様々な想いがよぎった。

Sop.阿部早希子、A. 村松稔之

Vn. 杉田せつ子、池田梨枝子、宮崎蓉子、佐々木梨花、Va. 春木英恵、Vc. 懸田貴嗣、Tior. 佐藤亜紀子、Org. 辻文栄、指揮：福島康晴、お話：佐々木なおみ

〈後半〉オラトリオ《ラ・ジュディッタ》(1694 年ローマ初演版)

後半では、スカルラッティの最重要オラトリオの一つである《ラ・ジュディッタ》を取り上げた。本作は P. オットボーニ枢機卿による台本を用いた 5 声のオラトリオであり、後に彼の父 A. オットボーニによる 3 声版 (1697 年) も作曲されているが、本公演では、より劇的効果の高い 5 声版を早い段階から採用する方針を定めていた。時間的な制約からレチタティーヴォはカットし、重要な場面のアリアのみを取り上げ、物語の展開を企画者が説明する演奏方針であったが、抜粋箇所決定に悩み、全体の構成が出来上がったのが 10 月半ばのことだったように記憶している。

演奏者には、初日の演奏作品を含め、全プログラムについての作品解説、歌詞対訳、あらすじ、人物相関図、オペラおよびオラトリオの構成表を 10 月頃から配布しており、それらを基に各自が十分な準備を進めていたようである。その成果として、各登場人物の性格描写が実に明確で歌唱、表現力ともに圧巻で、抜粋上演でありながら強い劇的効果をもつ演奏となったことは、企画者にとって何よりの喜びであった。

Sop. 阿部早希子、佐藤裕希恵、A. 村松稔之、T. 中村康紀、Br. 藪内俊弥、Rec. 太田光子、大塚照道、Vn. 杉田せつ子、池田梨枝子、宮崎蓉子、佐々木梨花、Va. 春木英恵、Vc. 懸田貴嗣、Tior. 佐藤亜紀子、Org. 辻文栄、指揮：福島康晴、お話：佐々木なおみ



演奏会 2 日目も大きな拍手に包まれて終演となった。約 1 年にわたる極度の集中期間は一瞬にして過ぎ去り、音楽の儚さと、それゆえ抱く次なる夢を胸に帰途についた。

アンケート結果

演奏会終了後に実施したアンケートでは、以下のような回答が寄せられた。

- ・A.スカルラッチィは演奏会で初めて聞いて良い体験になった。出演者もバロック音楽の一流の方々と揃えていて高い水準で楽しめた。
- ・スカルラッチィのオラトリオが日本で演奏されるのは珍しいのではないか。その意味で非常に貴重、かつ共同研究にも資する演奏会で大変ありがたかった。
- ・2 日間にわたる充実した企画、すっかり魅了された。
- ・気合の入った素晴らしい演奏会だった。神田教会というロケーションも素晴らしいと感じた。日本イタリア古楽協会の総力結集の名演。
- ・みなさんのすばらしい熱量を感じた。バロックという時代を私なりに感じる事ができた。オンライン講座もなかなかよかった。
- ・立派なパンフレットであった。
- ・解説書（500 円）も大変充実していて書棚で永久保存したいと思った。

また、SNS 上でも終演直後から多数の投稿が見られ、古楽の第一線で活躍する演奏家による高水準の演奏や、日本では稀少なレパートリーを取り上げた点について、きわめて好意的なコメントが寄せられた。会場においても、多くの来場者から直接、熱意ある言葉をかけていただいた。

出演者にとってもスカルラッチィの音楽は演奏家魂が揺さぶられるような難解さと崇高さに満ちており、リハーサルから本番に至るまで、密度の高い充実した時間を共有することができた。

以上のように、スカラッチェの生涯と作品、ならびに近年の研究成果を講演会で紹介し、実際の演奏会で作品を聴いていただくという一連の企画が無事に終了した。日本音楽学会、公益財団法人野村財団、公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京【東京ライブ・ステージ応援助成】からの助成を賜り、研究と演奏が結びつく企画がスカラッチェの音楽とともに実現できたことに心より御礼申し上げたい。

最後にこの企画を支えてくださったスタッフの皆様、豊かな音楽性とあふれんばかりのエネルギーでスカラッチェの音楽に命を吹き込んでくださった演奏家の皆様に、改めて深く感謝の意を表したい。